

---

## 大学は研究するところ

古谷野 亘

### はじめに

今、われわれは大学というところにいます。大学は高校の次の段階の学校だと思って入学した人がほとんどでしょう。しかし、入学した途端に、高校までの学校とはずいぶん違うと感じたのではないのでしょうか。慣れてしまえば何のことはないのですが、自分の教室がありませんし、一年の春学期の履修登録で四苦八苦した人が多いのではないかと思います。

大学が高校までの学校と違うのは、大学がもともと研究機関だったからです。専門家のみによって構成され、研究だけをしている組織だったのです。現在の大学で言えば、先生だけがいるところだと思えばよいでしょう。しかし、次の世代の研究者を養成することが必要ですし、専門家を養成して社会の他の場所に出していくことも求められましたので、弟子を入れて教育することになりました。弟子にあたるのが学生でした。そして、徐々に教育のほうに主になって、現在の日本では、研究者の養成は一部の大学の大学院のみになっています。

大学が研究するところであつた時代の名残りがあります。それは、たとえば卒業研究です。これについては、後でまたお話しいたします。

大学で勉強すると言いますが、研究と勉強は違います。研究というのは、自ら問いを出して、その問いに自ら答えることによつて新しい知識を得ていくことです。それに対して勉強は、すでにある知識を身につけることです。勉強の成果を確認するためには試験があつて、その試験の問題を作るのは先生、そして正解があります。しかし研究の場合、自分以外に出題者はいませんし、正解があらかじめ決まっているわけでもありません。

研究してよい答えを得るためには、よい問いが必要です。よい問いを出せるようになるためにはどうすればいいのかと言いますと、勉強してその事柄について知識を得ておくことです。卒業研究は大学が研究機関だつたころの名残りだと言いましたが、三年間勉強した後、研究ができるようになるというのは正しい順序ですし、また正しい伝統だと思ひます。

## 古谷野の研究

私は高校を卒業してから五〇年近くの間、大学と研究所にだけおりましたので、ずっと研究ばかりしてきました。大学教員をしていたときには授業もしていましたし、今もしていますけれど、それが本来の仕事だと思つたことはありません。

## 幸福な老いの研究

四〇年以上前、大学院に進んで最初に取り組んだのは幸福な老いに関する研究でした。当時、活動理論と離脱理論という二つの理論があつて、論争がありました。活動理論というのは社会的活動が多ければ幸福な老いを実現できるといふ理論です。このときの社会的活動とは人間関係の豊かさですから、人間関係が豊かであれば、人は幸福に老いることができるというのが活動理論の主張でした。もう一方の離脱理論はもう少し複雑で、人間関係の豊かさは幸福な老いに関連するけれど、そこに年齢の影響があると考えました。年齢が高くなると心的エネルギーが減つて、人間関係の豊かさと幸福な老いとの関係がなくなる、あるいは人間関係が豊かすぎるとかえつて不幸になると考えたのです。

人間関係の豊かさと幸福な老いの関係を調べようとするとき、最初にしなければならないのが幸福な老いの程度を測ることです。もし幸福な老いの程度を測ることができれば、人間関係が豊かな人とそうでない人を比べて、どちらが幸福かを確認できます。幸福な老いの程度を測る物差しはいくつかあつて、そのほとんどはアメリカ製の物差しの翻訳でした。しかし、いずれにも問題のあることがわかつてきましたので、自分で作ることにして、九項目の物差しを作りました。<sup>(1)(2)</sup>

全国の六五歳以上の高齢者一、八〇〇人余りと大阪府河内長野市の一人暮らし高齢者七〇〇人余りを対象に、この物差しを使って幸福な老いの程度を測つた結果が図1です。得点が高い、とても幸福な人もいますが、多くはありません。反対にとても不幸な人もいないわけではありませんが、やはり少なく、多くの人が真ん中あたりにいるということになりました。このようにして幸福な老いの程度を測つて、それがいろいろな条件によつてどう異なるかという研究を行いました。

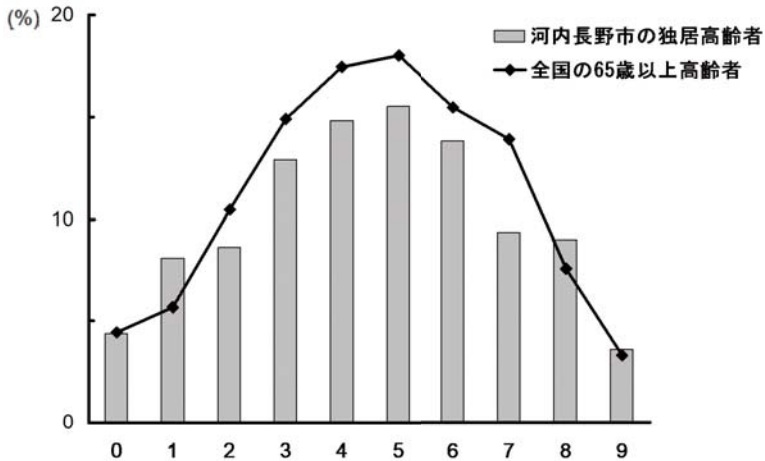


図1 生活満足度尺度Kの得点分布

図2はそのひとつです。縦軸は幸福な老いの程度で、上に行けば行くほど幸福度が高いこととなります。横軸は配偶者の有無です。男性と女性で平均値を比較しました。そうしますと、男性は配偶者がいると幸福になるのですが、女性は配偶者がいると不幸になるという結果になりました。<sup>(3)</sup> 図2の左側の図です。ここでニヤツとしたのは先生や職員の方だと思えます。

しかし、左側の図には秘密がありまして、配偶者の有無と性別以外のほかの条件の影響をすべて統計的に取り除いてあるのです。とりわけ大きな影響をもっていたのが収入です。収入などの影響を取り除かずに平均値を比較すると、右側の図のようになります。男性ほどではないものの、女性でも配偶者がいるといくらか幸福になるということです。男性はこれで安心してくなるのかもしませんが、安心してはいけません。なぜかと申しますと、配偶者がいると収入が増えるので、それで幸福になっていたただからです。

何年前かに「亭主元気で留守がいい」というテレビのコマーシャルがありました。ふつうの人の感覚として何となくわかっていることが大つぴらに歌われたので、思わずニヤツとした人が多かつ

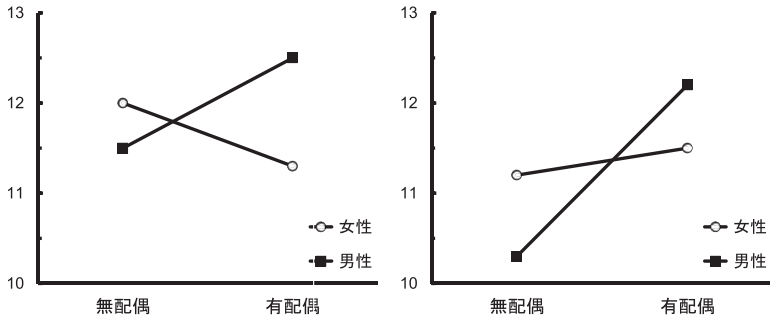


図2 配偶者の有無と幸福度  
古谷野、他 (1992)

たのです。この研究では、人々が漠然と感じていることを、データがしっかり裏付けたことになります。

実は、社会・行動科学の実証研究に世紀の大発見というのはまずありません。多くの人が何となく知っている、あるいはわかつてはいるけれども証拠はないというようなことを立証できれば、その研究は大成功です。これはその一例だったのではないかと思います。

### 健康度を測る

高齢者を対象に人間関係の豊かさと幸福な老いの関係を調べていくときに無視できない要因がひとつあります。それは健康です。健康な人は幸福で、人間関係も豊かであることが多いのですが、健康でなくなれば、幸福でいられないですし、人間関係も少なくなってしまう（図3）。ですから、幸福な老いと人間関係の豊かさとの間の純粋な関係を知るためには、健康の影響を取り除くことが必要です。健康の影響を取り除くためにはまず健康の程度を測らないといけません。そこで、健康度を測る作業に取りかかりました。

健康度を測るといふ話になると、すぐに思いつくのは医師の診断や医学的な検査だろうと思います。しかし、これは駄目なのです。医師の診断や

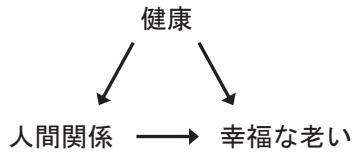


図3 幸福な老い、人間関係の豊かさ、健康度の関係

医学的検査は病気や異常を発見するには役立つのですが、健康そのものを測るのには向いていません。健康そのものを測るということでは健康度自己評価、つまり自分で健康だと感じられるかどうかの方が有効です。

ところが、高齢者の健康度自己評価を調べますと、年齢が高くなればなるほど自分で健康だと思う人が増えるという不可解な現象が起きます。実際には体の不調を抱えている人が増えていくのですが、それにもかかわらず、自分で健康だと思う人が年齢とともに増えるのです。これは、ある種の心理的なメカニズムが働いて、健康だと感じさせるからだとされています。そこで、この方法も駄目ということになりました。

では、どうしたらいいのか。生活機能です。生活機能というのは毎日の生活を営んでいくのに必要な身体的・心理的・社会的な能力です。いろいろな指標があるのですが、たとえば、ご飯を食べる、トイレに行く、風呂に入るといった日常生活動作の自立性、あるいは買い物や預貯金の管理をするといった手段的日常生活動作の自立性で評価できます。移動能力も指標になります。人間は動物の一種ですが、動物というのは動く物と書きますから、自分で動けるというのはもともと基本的な生活機能のひとつです。

図4は今年学会で発表した研究です。八〇歳の高齢者の移動能力を調べて、四年半追跡しました。八〇〜八五歳の五年間は心身の状態が大きく変わる時期です。この時期になりますと死亡率が高くなりますし、介護を必要とする人も急が増えます。この研究では、移動能力に支障のない人と支障のある人に分けて比較しました。男性でも女性でも、移動能力に支障のある人のほうが死亡率が高く、介護が必要になる割合が高く、医療費も月平均の介護費用も高いことがわかりました<sup>4)</sup>。

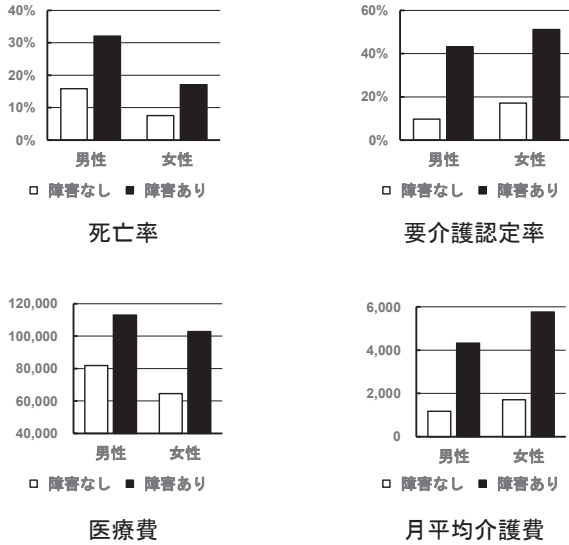


図4 80歳高齢者の移動能力と4年半の追跡結果  
古谷野、他(2019)

若いときにはほとんどの人が移動能力に支障はないですから、ここで移動能力に支障があった人とは、老化によって移動能力が低下した人たち、簡単に言うると老化が進んだ人たちです。老化が進んでいる人ほど早く亡くなったり、医療や介護を必要とするようになってきたりするのは当たり前話ではありません。しかし、たとえ当たり前のように見えても、小さなことをいちいち確実に証明していくのが実証研究なのです。

生活機能を段階的に測ることができないかというところで、物差しをまたひとつ作りまし(5)(6)た。それを使って、全国の六五歳以上の高齢者と大阪府河内長野市の一人暮らし高齢者の生活機能を測ったところ、図5のようにになりました。得点が高い、つまり生活機能が自立している人が多いのですが、生活機能の低下した人たちもいくらかいるという結果です。全国の高齢者の代表サンプルで見ますと、およそ四割の人が満点の一二点、三割くらいの人が一二点か一二点でした。このあたりまでは日常生活にまったく不自由はなく、高

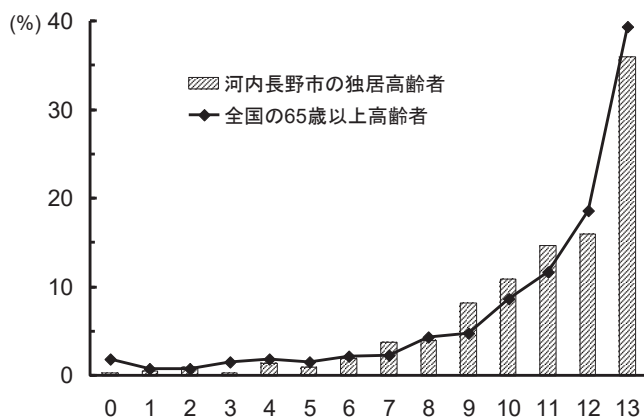


図5 老研式活動能力指標の得点分布

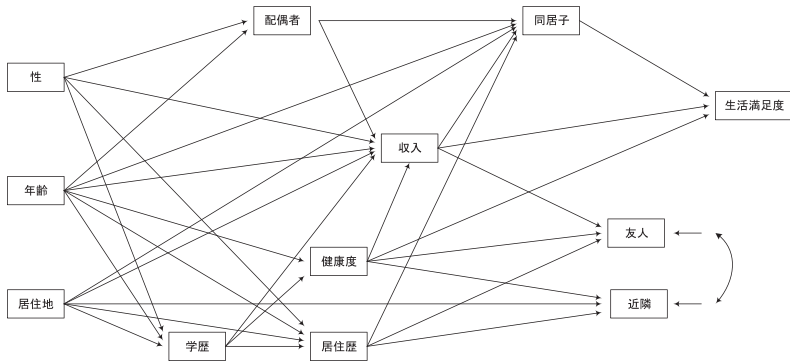
齢ではあっても若い人と同じように生活できます。

この物差しを使った分析のひとつが図6です。図の右上に生活満足度、先ほどの九項目の幸福な老いの物差しの得点があり、中央の下の方に一三項目の物差しで測った健康度があります。生活満足度に直接的な影響を及ぼしているのは、健康、収入、家族でした。<sup>8)</sup>

人間関係の豊かさの指標は、図の右下にある友人と近隣の二つでしたが、これらは幸福な老いに関係していないという結果になりました。なぜこうなったのかを考えて、人間関係の豊かさを測る物差しに問題があったことに思い当たりました。この研究で使った人間関係の豊かさの指標は、お付き合いのある友人と近所の人の数でしたが、人数だけで人間関係の豊かさを表すには無理があると考えざるをえなかったのです。

幸福な老いと人間関係の豊かさ、そして健康の関係(図3)を分析しようとして、幸福な老いと健康の程度を測る物差しは作ったのですが、肝心の人間関係の豊かさが残ってしまいました。それで今度は、人間関係の豊かさを測る研究に手をつけました。最初これは簡単だと思っていたのですが、実際には一番難しく、二〇年近くかけてもまだできていません。社会学にとって人間関係は究極の課題





対象は全国の65歳以上の在宅高齢者 (n=1510)。  
 $\chi^2 = 57.26$ ,  $df = 31$ ,  $\chi^2 / df = 1.52$ ,  $GFI = .994$ ,  $AGFI = .984$ ,  $CN = 1180.3$ .

図6 生活満足度と関連要因  
 古谷野 (1993)

ですから、難しくって当然だったのかもしれませんが。

### 人間関係を調べる

ほとんどの人は、毎日の生活の中で多くの他者(自分以外の人)と会っています。会っているからには何らかの交流があるはずですが、しかし、誰と会っているか、どんな交流をしているのか、さらには交流があると何かよいこと、悪いことがあるのか、実はこれらがまるでわかっていないのです。ひよつとしたら、これは従来の研究の隙間になっているところなのではないかと思えます。

そこで、日常生活において家族、親族以外の他者との関係がどうなっているかについて、多くの観察や聞き取りを行いました。その結果わかったのは、日常的に会っている他者には三つのタイプがあるということでした。目的内関係の他者、場を共有する他者、特に親密な他者(友人)の三つです。

目的内関係の他者というのは、役割関係にある他者です。たとえば職場の同僚、お医者さんや看護師さん、買い物に行ったときの店員さんは、目的内関係にある他者です。お店に行つて買い物をするれば店員さんとの交流があるのですが、交流の目的は物を買

うことであつて、その人に会うためにお店に行くのではないはずです。目的を達成するためにはいい関係を作つておいたほうが有利ですから、いい関係を作ろうとする力が働きます。しかし、これは役割に基づく関係ですので、その人でなければいけないということではありません。もちろん目的がなくなれば、その人との関係を維持する必要はなくなります。日常的に接している他者の中では、このタイプの人が一番多いはずで。

二番目に多いと思われるのが場を共有する他者です。たとえば公園や病院で会う人、クラスが一緒の人、近所の人など、特定の場所や場面を共有している他者です。交流は、その場を共有していることから偶然に起こります。たとえば、ここに座つて、隣に今まで知らなかつた学生がいる。うちの大学の学生だということは知っているけれど、特に親しいわけではなく、話をしたこともない、そういう人が隣にいた。思わずコソコソと話をする。「長いな、いつまであいつ話しているんだろな」というようなことを言うと、場を共有する他者との間に交流が生じたことになります。いい関係をもつていたほうがその場を快適に過ごすことができますから、できることならいい関係を作ろうとするわけですが、よい関係を作ろうとする力はそれほど強くはありません。偶然生まれる関係ですから、その場がなくなればすぐに解消されてしまうでしょう。

三番目が特に親密な他者(友人)です。多くが目的内関係の他者あるいは場を共有する他者として知り合つた後、一定水準以上の親しさをもつようになった人たちです。たとえば、学校時代の友だちや同僚だつた友人です。この人たちとの関係では、交流そのものが目的になります。買い物をするためにお店に行くのとは違って、友だちに会うためにどこかに行くのです。その人に限つての関係ですから、他の人が代わることはできません。

特に親密な他者(友人)との関係は、目的や場の共有がなくても維持されます。たとえば、学校時代の友人とは何十年たつても関係が維持されます。社会人になると、特に親しいと言えるような他者と会う機会はそれほど多く

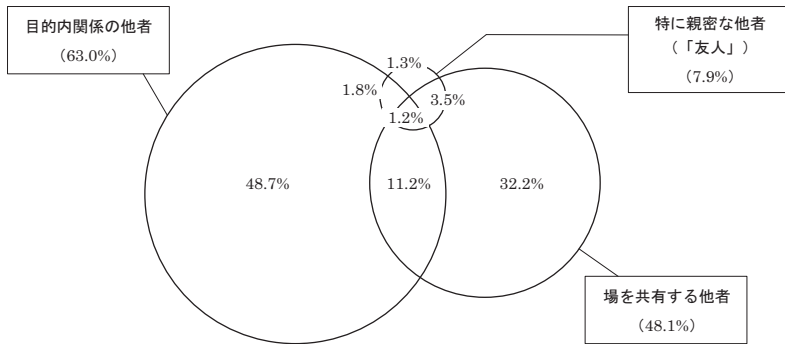


図7 日常生活で交流のある他者の分類  
古谷野、他 (2016)

ありません。たとえば年に数回、あるいは数年に一度の同窓会で会う程度になってしまいます。ですから、社会人が日常生活で出会う他者たちの中で、特に親密な他者（友人）は少ないと考えられます。

子どもと同居していない高齢者六六人の協力を得て調べましたところ、予想通り目的内関係の他者が一番多くておよそ三分の二くらいでした。「場を共有する他者」がそれに続いてこれが半分くらい。特に親密な他者（友人）は一割に届きませんでした<sup>⑨</sup>。ただ、調査対象者の数が少ないので、これからもう少し調べなければいけないと思っています。

結局、初めのころの課題を四〇年間追いつけて、当初一番簡単そうに思えた人間関係のところでもつまずいて、二〇年近くずっと足踏みをしているような状態です。もうしばらくの間大学に置いてもらえそうですので、その間にもう少し進んでおきたいと念願しています。

### 大学は研究するところ

さて、もう一度大学というところについてです。大昔、大学はその道のプロが集まって研究しているところでした。現在でもその名残りがあ

ると申しました。そのひとつが卒業研究です。小学校から大学までの一六年間の教育課程の総まとめにあたるのが卒業研究です。昔むかしの大学であれば、弟子や見習いであった期間を終え、一人前の専門家として大学の正規のメンバーになる力量を持つているかどうかを試される機会でした。現在では習得しなければならない知識の量が増えましたし、それに合わせて教育課程が伸びましたから、一六年間だけで本職の研究者や高度な専門知識を持った専門職になれるわけはありません。しかし、大多数の人にとっては、教育課程の総まとめになるのが卒業研究です。これが大事でないわけはありません。

ほとんどの日本人には研究という活動をした経験があります。それは小学生のときの夏休みの自由研究です。自由研究のテーマは、朝顔のツルの伸び方とか芋虫がモンシロチョウになる過程を観察するとか、大人から見ればたわいのないものではあるのですが、研究は研究です。つまり、自分で問いを出して自分で答えを見つけ、オリジナルな知識を得るという意味では立派な研究で、本職の研究と異なることはないのです。違うのは問いの種類と答えを得るための手続きの難しさだけです。

夏休みの自由研究はしよせん宿題ですから、やらないと叱られます。宿題ではあるのですが、楽しかったという記憶があるのではないのでしょうか。少なくとも漢字の書き取りや計算問題よりはずっと楽しかったはずです。そこがポイントです。つまり、研究するというのは楽しいことなのです。それは、大学院に進んでも、本職の研究者になっても同じです。もちろん苦しいことや大変なこともあります。自分で問いを出して、その問いに対する答えを得ていくというのは楽しい活動なのです。ですから、私は四〇年間も同じテーマで研究を続けていられるわけです、大学教員の多くはそうだろうと思います。

なぜ研究するのが楽しいのか。おそらくそれは、人間が知りたがり屋の動物だからだろうと思います。そのこと

をパスカルというフランスの哲学者は「人間は考える葦だ」と表現しました。ですから、学生の皆さんには、一六  
年の教育課程の総まとめとして、よい卒業研究をしていただきたいと思います。教育課程の前のほうであま  
りうまくいかなかった人も、この部分で取り返して、立派な大学卒になって社会に飛び出して行くことが十分可能  
です。そして、一度本格的に研究という活動をして、それを仕上げますと、今度は違うテーマや課題についても研  
究できるようになります。できるようにするのは、研究する生き方です。

卒業研究は、大学まで行つて卒業した人であれば、研究する生き方ができるはずだという考えの上に立っていま  
す。それは具体的にはどういうことかと申しますと、毎日の暮らしの中、仕事の中で、疑い、学び、問いを出し、  
考え、答えを見出していくという生き方です。周囲に合わせるのではなく、誰かに言われて闇雲に従うのでもない。  
たとえば、右に行けと言われたら、右でなくてはいけないのか、左ではいけないのかと問うてみる。そういう生き  
方、そして納得した上でなければ動かないという生き方、それが研究する生き方です。

学生の皆さんはせっかく大学まで来たのですから、考える人、研究する生き方ができる人になって卒業してい  
たいと念願しています。

### 関連業績

- (1) 古谷野巨「モラル・スケール、生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性(その2)」『老年社  
会科学』五、一二九—一四二、一九八三。
- (2) Koyano, W., et al., 'Development of a measure of subjective well-being in Japan'. *Facts and Research in*

- Gerontology* 1994, Supplement, 181-187, 1994.
- (3) 古谷野亘「団地老人におけるモラールと社会関係——性と配偶者の有無の調節効果」『社会老年学』三五、三一九、一九九二。
  - (4) 古谷野亘、他「都市80歳高齢者における移動能力の障害とその後の医療費・介護サービス点数——杉並区健康長寿モニター事業」第61回日本老年社会科学会大会一般報告、二〇一九。
  - (5) 古谷野亘、他「地域老人における活動能力の測定——老研式活動能力指標の開発」『日本公衆衛生雑誌』三四、一〇九—一一四、一九八七。
  - (6) Koyano, W., et al. 'Measurement of competence: Reliability and validity of the TMIG Index of Competence'. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 13, 103-116, 1991.
  - (7) 古谷野亘、他「地域老人の生活機能——老研式活動能力指標による測定値の分布」『日本公衆衛生雑誌』四〇、四六八—四七四、一九九三。
  - (8) 古谷野亘「老後の幸福感の関連要因——構造方程式モデルによる全国データの解析」『理論と方法』八、一一一—一二五、一九九三。
  - (9) 古谷野亘、他「高齢者が日常生活において交流している他者との関係——その分類と把握」『老年社会科学』三八、三四五—三五〇、二〇一六。